

座間の大凧 大凧ができるまで

担当

大凧まつり実行委員会事務局(商工観光課内)
☎046(252)7604 ☎046(252)3550



※写真の説明はページ下部をご覧ください。

大凧は、市大凧保存会が中心となり、市民や市内の団体などの協力の下、およそ3カ月をかけて制作されます。

骨組み

大凧には、軽くてしなりのある「メダケ」と強くて長さのある「マダケ」を約150本使います。

1本そのままの竹や数本を組み合わせた竹、細く割った竹を麻縄やわら縄で結び、組んでいきます。

骨組みは、竹の強度やバランスを見ながら進め、横と斜めの竹はしなりのあるものを、縦の竹には強いものを使用します。

紙貼り・縄入れ

強度と風の流れを考え、大凧用に用意した新聞紙大の特別な和紙を貼り合わせます。

縦1・7メートル、横6・76メートルの大きさに貼り合わせた和紙16枚を組み合わせて大凧に使用します。

貼り合わせた和紙には、大凧へ結び付けるための

縄を取り付けます。

文字書き

縄入れを終えた和紙を並べ、木炭で下書きをします。並べた和紙は、百畳敷き(13メートル四方)になるため、小学校の体育館で文字書きを行います。

下書きが終わると、黒い墨を使って文字の縁取りを行い、その後、赤と緑の2色で凧文字を塗り分けます。

凧文字の色塗りは、子どもを中心に多くの市民が参加して行います。

糸目付け

骨組みを終えた大凧に凧を引くための47本の凧糸を結び付け、凧糸の張り具合を決める作業を糸目付けと言います。

大凧の骨組みを実際に凧を受ける姿勢に起こし、凧と凧糸のバランスを決めていきます。

糸目付けは、当日、大凧が上がるかどうかを決めると言われる、大凧づくりの中でも重要な工程です。

大凧の歴史

座間の大凧挙げは、子どもの初節句を祝う目的で始まったとされ、200年以上続く伝統行事です。

江戸時代

文化・文政年間(1804~1830年)の頃、初節句を迎えた子どもの健康と成長を願うため「祝い凧」が掲揚されました。凧揚げと凧作りは、若者たちの娯楽として受け入れられ、江戸時代後半に最盛期を迎えました。

明治〜戦前

江戸時代後半には、既に「大凧」と呼ばれていましたが、大きくても2間(3・6メートル四方)で、家ごとに揚げられていました。

凧文字「稀風」

市の大凧には、伝統的に時勢などを反映した漢字二文字を書き込んでおり、今年の大凧文字は「稀風」です。

公募により集まった58作品の中から決定した凧文字「稀風」は、19年ぶりに誕生した日本人横綱「稀勢の里」の文字が用いられており、「大凧も

時が経つと、「祝い凧」は大きく、高く揚がった方が縁起が良いと言われるようになり、若者たちは、凧の大きさと高さを競い合うようになりました。

次第に凧は大型化し、地区ごとの大きな行事になっていきました。

戦後〜現在

戦後には、電柱の増加などの影響で凧揚げのできる場所が限られ、昭和40年代から市を挙げて相模川河川敷で掲揚するようになりました。

昭和50年には、座間市大凧保存会が結成され、相模川河川敷で「座間市大凧まつり」を開催するようになりました。

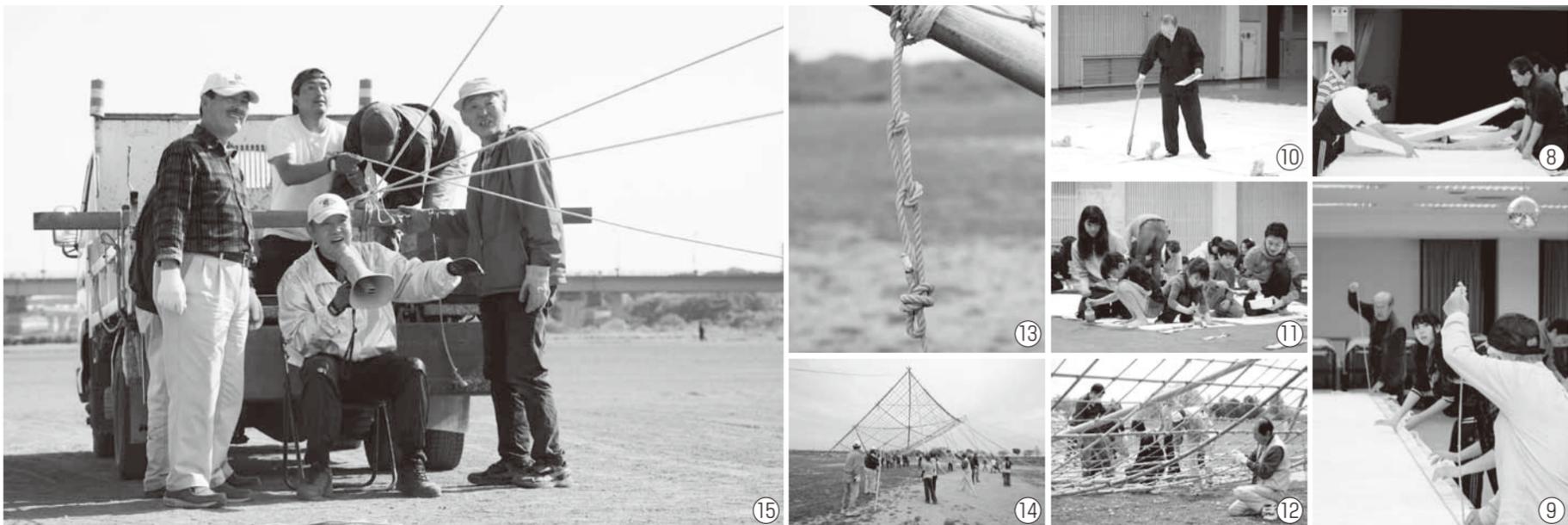
現在では百畳敷き(13メートル四方)の大凧を掲揚しています。

稀に吹く勢いある風を受け、空高く舞い上がってほしい」という意味が込められています。

凧文字は、右上の文字に太陽を表す「赤」、左下の文字に大地を表す「緑」で色を付けます。



文字書きを終えた和紙



- ①必要な大きさに竹を割る(骨組み) ②竹の厚みを揃える(骨組み) ③複数の竹を縛って1本に(骨組み) ④骨組みは細かい採寸が重要(骨組み) ⑤竹を組み合わせる(骨組み) ⑥組んだ竹(骨組み) ⑦風を受ける形に反らせる(骨組み) ⑧和紙を貼り合わせる(紙貼り) ⑨長さを合わせて縄を取り付ける(縄入れ) ⑩舞い上がった凧をイメージして行う下書き(文字書き) ⑪色塗りには子どもも参加(文字書き) ⑫糸目を結び付ける(糸目付け) ⑬力がかかるほど締まる糸目(糸目付け) ⑭風を受ける姿勢に起こす(糸目付け) ⑮凧糸の張り具合を決める(糸目付け)